



TITLE:

<巻頭言> ふたつの世界地図と地域観

AUTHOR(S):

中野, 一新

CITATION:

中野, 一新. <巻頭言> ふたつの世界地図と地域観. 資本と地域 2009, 5

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/86203>

RIGHT:

ふたつの世界地図と地域観

中 野 一 新

ここにふたつの世界地図がある。ひとつは私ども日本人が小学生の頃から慣れ親しんでいる世界地図である(地図 1)。いまひとつは、欧米の人たちが見慣れているそれである(地図 2)。

いまから 20 数年前に、筆者はアメリカに留学したが、迂闊にも、それまでは世界中の人々が同じ世界地図を利用していると錯覚していた。そんな筆者は、渡米して程なく、目から鱗の体験をすることになる。

幼少の頃から右側の地図に慣れ親しんでいるアメリカ人たちにとっては、日本という国は、文字どおり世界の東端、ファーイースト(Far East: 極東)に位置するありふれた一国に過ぎないということに、気づかされたからである。彼らアメリカ人は、地図上で大西洋のスケールは実感できるが、太平洋の大きさ、アメリカの西海岸と日本との空間的距離にはまったく無頓着な国民であることを思い知らされた(同時に、左側の世界地図ばかり見て育った日本人の多くは、太平洋に較べて大西洋のスケールがいかに小さいかを実感できていないことにも気づかされた)。

筆者は学生時代を“60 年安保闘争”に明け暮れた世代だが、その当時から、日米安全保障条約、ひいては日米関係についての両国民の受け止め方に、とてつもなく温度差のあることが気がかりであった。60 年安保からほぼ半世紀を経た今日なお、日本人のアメリカに対する“片思い”、真の意味でのイコール・パートナーになっていない現実、筆者は怒りさえ覚えるが、こうした両国民間における認識の差を醸成している一因は、案外、幼い頃から接している世界地図の違いによるのかもしれない。



【地図 1】



【地図 2】

ところで、近年、中国・インド・ブラジルといった新興国の経済力、ひいては国際政治における発言力が一際強まり、これまでアメリカと EU 主導で強行突破されてきた国際外交は、相次いで躓きを見せている。その典型が今回の WTO 交渉（ドーハ・ラウンド）であろう。

周知のように、世紀の転換期頃から世界の経済事情は一変し、アメリカ東海岸からの対ヨーロッパ貿易よりも、西海岸からの対アジア貿易（対オセアニア貿易を含む）の方が上回る事態さえすでに現出している。アメリカは環太平洋の国々（地域）への支配力強化を狙って、「アジア重視」を謳い、同国のイニシアティブでアジア太平洋経済協力閣僚会議（APEC）も発足させている。

経済のグローバル化が急ピッチで進展し、発展途上地域に林立する大国が台頭してきた昨今、広大な太平洋の兩岸に位置するアジアとアメリカの国民同士の交流が、ますます重要になってきていることは論を待たない。ただ、ここにきて筆者がとても気がかりなのは、日本を含めたアジアの人たちが手にする世界地図と、アメリカの国民が手にするそれが違う点である。アメリカの西海岸とアジアとの空間的距離の並外れた大きさを、今なお実感できないアメリカ国民との認識ギャップは、そう易々とは埋められそうにないからである。

一例を挙げよう。最近日本では、「フード・マイレージ」ということが、しきりに問題視されている。食料の供給状況を、輸送量と輸送距離の双方から把握する考え方で、イギリスの民間団体 Sustain が提唱している Food Miles 運動の日本版である。アジアはもとより、地球の裏側の南北アメリカ大陸からも、大量の食料を輸入しなければならないことに対する危機感、そして、大量の CO₂を排出せずには、海を通じても空を通じても食料を輸入できない現実、こうした脅威にさらされて、日本では「フード・マイレージ」の発想が、着実に浸透してきている。だが、太平洋のスケールに鈍感なアメリカ国民とは、こうした発想をどれだけ共有できるのだろうか。甚だ心もとない。

本格的な経済グローバル化の時代を迎えて、私たち日本人が、じっくり考えてみなければならない問題が、二つの世界地図のなかにも伏在しているようだ。

グローバルなスケールでの地域観、地域の生きた姿を体系的に認識する能力、言い換えれば、地域を見抜く眼力を養うことが、とりわけ強く求められている秋である。